



平成12度教養基礎教育ワークショップの概要

ただいまから教養基礎教育ワークショップを開催します。

教育文化学部、それから工学資源学部の先生、遠方からわざわざどうもありがとうございました。このワークショップは教養基礎教育調査・研究委員会という全学の委員会がありますが、そこがFDの一環として毎年開催しています。過去にも開催されていますが、今年度は、講演のような形で終わるよりも具体的な事業を対象にその内容をみんなで理解したり、知ったりして、より良い教養基礎教育ができるように活発な検討、討論を主眼にしたワークショップにということでやろうということに委員長と決定した次第です。3回予定しておりますが、今回その第1回です。各学部1回ずつ責任を持って開催するという取り決めで、初回は医学部の担当で開催する次第です。今日のテーマは教養教育科目の保健、環境、健康に関する授業のワークショップということで、この内容に相当する先生方4人に一応プレゼンテーションしていただきその個々についてディスカッションできればということをお願いしております。このワークショップを契機に教養基礎教育が良い方向に改善改革されていくことを期待している次第です。それでは司会にマイクをお譲りしますので宜しくお願いします。

今吉岡先生がおっしゃられた通りです。去年とおととは、例えば試験のやり方に関するワークショップや試験の評価に関するワークショップというものでありました。今回は1度授業の内容にも入ってみたいということで、大きく3つに分けました。1回目は保健、環境、健康とかいうこと、2回目は国際的なことや国際関係の講義、3回目は倫理的な講義という分類で行うことにしました。今回のスピーカーは長沼先生、苗村先生、松富先生、そして田中先生の4

人です。大体15分から20分くらいお話をさせて頂いて、10分くらいの討論をします。それでは最初の長沼先生宜しくお願いします。

教育文化学部の長沼です。私は地域科学課程の生活者科学講座に属しております。実は教育文化学部のスポーツ健康教育講座の佐藤靖先生の方から急に出張のため出席できなくなり私に健康と関わらせて食について話題を提供しなさいと言われましたのでこの席に参りました。テーマとうまくつながらない点が多々あるかと思いますが、どうぞ宜しくお願いいたします。教養教育科目を担当して3年目に入っております。3年目に入っているいろいろな問題点が出てきました。これを機会に授業の改善の方向性を探っていけたらと思い授業内容の報告をさせていただきます。私の担当しております科目、食生活の科学、「秋田の食」ですがこれは目的主題別科目の中に位置付けられております。主題としましては地域社会論の中に入っております。目的としましては1つは知識を伝授するという学問の体系と、それから技術的な側面である学問の方法と、学生と共に討議して学問の進展について考えるという3点があります。私としましてはこの授業は学生が考えるというところに主眼を置きました。もちろん学問の進展まで行かないと思いますが主軸を学生と共に考えるというところにおいたということです。さて、それで、食生活というのはすべての人が自然とか社会とか文化的環境要因のもとで毎日営んでいるものです。そしてその食生活のあり方が身体的、精神的あるいは社会的健康というものに大きく影響を及ぼすこととなります。現在食生活が豊かになったと言われており、いつでもどこでも好きなものを好きなだけ食べられるという状況になってきました。食に関する情報も氾濫しております。その一方では若い世代においては食に関する興味、関心が希薄であるということ、それから欠食率も非常に高いということなど問題点が多く析出しております。そこで日常何気なく営んできた、そして日常何気なく営んでいる食生活について関心を喚起するという、食生活への関心を喚起させるということを授業の主眼としました。そのために1つ、食の心理的側面、おいしく食べるという点からアプローチするという、それからもう1つは分析とか検査とか調査などを実際に学生が実施し、参加型の授業にしたいということが本授業のねらいであります。まず健康と食生活を考えてみたいと思います。健康の維持増進にはもちろん運動と休養とそれから食生活が関わってきます。もちろん食は生理的欲求を充足させるこの栄養機構とか生体調節機能が重要であることは言うまでもありません。本授業はこちらの精神的、心理的欲求を充足させる、あるいは社会的欲求を充足させていく、即ち感覚機能の側面から食を捕らえていくものです。食嗜好という感覚機能に関わることは私たちの食行動を誘発します。おいしく食べることは食行動を持続をもさせます。また、おいしく食べることは精神的な満足感も与えます。そして、おいしさというのは栄養性にも影響を及ぼすということが最近の研究でも明らかになってきました。感覚機能という心理的側面から食を捉えてみようと考えたわけです。授業の目標は、資料にも書いてありますが、次の3点にしました。1点目は日常生活においておいしく食べることの意義について学生と共に考えたい、2つ目は地域社会論に基づいておりますので、秋田の食の実相を例にとり、それを把握して食べ方に影響を与える諸要因について考えてみたい、3つ目は自分と地域における食について自分の食、地域の食を見直して欲しいと考えたわけです。それで受講学生は、1期と2期によって所属学部や受講生の数が異なります。全体では工学資源学部が多く、1期については教育文化と工学資源の学生がだいたい半々くらいで残念ながら医学部の学生は非常に少なく、これはあとで課題のところでお話したいと思います。それでは授業の内容について述べます。今日配布しました資料にも授業の概要を書いてあります。個々の目標に対応して3つのブロックに分けています。授業の進め方は授業

時に資料を配布します。学問の体系、これまで明らかになってきたことを情報として提示します。その一方で、すべての授業とはいえませんが、授業の中でそれぞれが分析したり調査したりする、即ち実際に手を動かす、口を動かす、頭を動かすといったことによって考えて欲しい点を示します。実際の参加型の授業として、何のために食べるのか、あたりまえのことですがもう1度考えてみようということにしています。実際にその調査をして、その調査表等を提出物として出してもらい、その提出物の数と内容によって評価することになっています。それでは、具体的な授業の内容について述べていきたいと思います。今回はこちらが提示した資料の中身よりも学生の参加の様子を中心に報告したいと思います。まず目標の1、日常生活においておいしく食べることの意義について考えてもらうために、授業ガイダンスをふくめて四回の授業を構成しております。例えば、一回目は食行動の分析をとおして何のために自分たちは食べているのかを考えて食生活の構造の理解を深めると言う授業のスタイルです。次は実際に、秋田の銘菓というか簡単な食べ物を食べてもらい、嗜好意欲尺度を持って評価してもらいます。その評価した結果、なぜそのように評価したかという理由を聞いて、そこからおいしさのメカニズムを探っていこうという授業の流れになってます。そこで、1番最初の食行動の分析ですが、A4版の調査表に昨日1日の食事行動を記録していくという方法、食行動調査ということで、これを実際の授業時間内にすべてではないですが書いてもらいます。そこで、一体何のために食べるのだろうかということを考えて食生活の構造に結び付けていくということです。次の食嗜好のメカニズムのところですが、例えば、これまで明らかになったおいしさのメカニズムがあります。食べ物からの刺激を受けて、いろいろな感覚で受けとめて、大脳の中で認知して、価値判断して、情動とか食行動を表出していくわけです。こういうことを日常毎日毎日繰り返しているわけです。ただそこに新たに食べ物だけの刺激だけではなくて環境だとか生理状態だとか心理状態だとかみなさんがそれぞれもっている今まで培われてきた食経験を元にした食嗜好の影響で、今日のお菓子はおいしかったとか、評価していくわけです。1つの例として、「しとぎ豆がき」という秋田のお菓子食べて、何でこんな風に評価したのと聞きますと、いろいろな答が返ってきます。例えば、せんべいが好きだとか、好きだからおいしいとか、あるいは豆が嫌いだから評価が低かったとか、経験に関わる部分といわゆるおなかがすいていたからとか食欲がないからという理由もでて来ます。直接的にはお茶があればもっとよいという遠慮のない意見もでてきます。もちろん直接的な刺激として歯ざわりがよいとかしょっぱいからということもあります。自分で評価するということがおいしさのメカニズムに結びつくということを知ってもらうということです。3つ目が食歴調査です。私たちの食嗜好というのは長い間の食経験の上に蓄積されています。いわゆる食べ物が嫌いになったり好きになったりということには何かきっかけがあるということで、学生達自身の食歴を振り返ってもらいます。何で食べれなかったピーマンが食べれるようになったのか、飲めなかったコーヒーがおいしく感ずるのは一体なぜなのか、振り返ってみようというのが食嗜好形成の要因に関わる場所です。ここまでが1つ目のブロックです。次が秋田の食の実相を探ってもらい、なぜ秋田の食にはこんな特徴が出てくるのかの要因を考えてみようということを行います。いくつかの項目があります。最初は日本の国全体の国内比較を行い、その結果から、秋田の特徴、東北の特徴が出てきます。具体的には肉食や野菜食や豆食など、あるいはしょっぱい物好き甘い物好きという例を出していきます。1番最初の食の国内比較という資料分析ですがこれは国民栄養調査とか秋田県の県民栄養調査の結果を自分たちで分析する作業です。学生達が分析した結果の1例です。関東の場合を分析したら、動物性食品が多く菓子や油脂類が多く、肉もよく食べるよという結果です。それに対して東北地方を分析した結果は、次のとおりです。東北はまず総量が多い、

量的によく食べているということのようです。あとは米とかイモ類など植物性食品が多く、漬物とか醤油の摂取量が多く味付けが濃いという結果です。お酒も好きだよというところもあると思います。この様な分析から多分東北の特徴が見えてきます。県民栄養調査で同じように秋田の特徴が見えてきます。次は具体的に秋田の食の実相を探ってみましょうということになります。米について野菜について豆についてという風に進めていきます。そこで食ですからビデオも見るのも1つの方法ですが、私としましては感覚をフルに使って欲しいと考えています。食べ物を見て、嗅覚を使い、味覚で、触覚で、聴覚でと5感を全部使って欲しい、できるだけ実物といいますか、味わってもらいたいというのが1つありまして、これが感応検査という手法をとります。心理学的なアプローチということではいろいろな感応検査の手法を使いまして、この前のご飯を食べていただきます。で、食べていただいた県下を次の週に分析して、分析結果を示しています。これは学生さんの出身地を秋田県内と秋田県外に分けて、非常に乱暴なわけ方です。県外の方が非常に批判がある、秋田県外を全部まとめないでくれということもあるんですけども、便宜的に県内と県外違いがあるのかなということで結果をまとめていきます。県外は黄色で県内は緑なんですけれども、ここで秋田小町はなぜか優位に県内が好まれて、ササとかコシヒカリは県外の人が、これは優位差がなかったんですが、好むという。この辺ピラフは白いご飯だけが食べ方じゃないよということで示していきます。この辺で地域差が若干ながら見られてくるというところで、こんな風にいろいろ同じように追っかけていきまして、これは同じご飯ですけども、日本国だけじゃなくて諸外国とも比較しようということで、これは文献との比較です。ご飯を評価するときにはどんなおいしさを求めているんであろうかという、青はフランスのデータですので、フランスの場合はこうポロポロしててぼろぼろしているご飯が最も重視するわけです。それに対して日本人はこうないんですけど、一般に秋田の学生も県外の学生も温かくて弾力があるとかつやがあるとか、この辺に日本特有の評価を持っているということもあわせて分析をしていきます。これは豆食で味噌をやった場合でしたが、これも緑が秋田で赤が県外ですが、やっぱり秋田県人は秋田味噌が1番おいしいと答えるという。で、信州味噌は県外の人が多いという。この辺は一体どんな理由があるのだろうかということ。今度は味付けといいますか、塩味とか甘味について聞いたところ、これは秋田の特産品を挙げていきまして評価してもらおうんですけども、これも緑が県内で黄色が県外なんですけれども、なぜか秋田の特産品には秋田の学生の方が評価が高いんです。これは一体なんだろうかということでは有意な差ではありませんけれども、傾向としては県内のほうが秋田県の特産品に関しては評点が高いということが1つ現象として出てきました。こういう風に秋田の食の実相を探りながら、地域のにおける食について考えてみようというところに持っていきたく、いくわけですが、この辺は課題が多いところで、地域における食の特徴までは見えてくるんですけども、なぜその特徴が見られるか、その要因のところになりますと最終的には結局自然的環境が違ふとか、その背景となる文化的環境が違ふというところに帰結してしまうわけなんですけれども、居住地が変われば食べ物に対する評価がこんなにも変わるんだという。例えばこれは郷土の食で、これは2期の方たちにですが、秋田の食、きりたんぼ鍋を評価していただくわけですが、秋田の方たちですがきりたんぼ鍋をこれからも食べていきたいと思うし、伝えていきたいと思うんです。ところが県外の方たちはそういう気持ちがほとんどというか非常に薄いわけ。ですからあくまで地域の食というのはその地域の方々の帰属の食だといえます。そこに自分は秋田の生まれだから秋田の食を食べていきたい、伝えていきたいという帰属の食、社会的な欲求充足という側面が非常にこの地域と食という側面では強いのではないかなという風に感じております。それでは最後になりましたが、今後の課題について述べてみたいと思

ます。まず1つ、授業終わったときにしていただくアンケート調査の結果を頂いておりますので、その中のいくつか持ってまいりました。まず1つは食生活への関心の喚起のはずなんですが、なぜか質問や発言をしたかったかというとあまりしなかったとは思ってもらえてないということです。それでももちろん実際に発言する質問する機会が少ないということも反省点なんですけれども、この辺がいかにか質問発言を引き出すような授業をしていくかということが課題としてあります。それからもちろん板書の仕方が悪いとか、視聴覚機器の使い方が悪いということはいつも私に出される課題なんですけど、この辺はしゃべり方もよくないんですけど、この辺はどう改善していくかということは私個人の課題なんですけれども、こういう内容とか方法上の課題、授業後この科目に興味が増したかどうか、このところ年々否定文が増えているんです。思わないとかどちらともいえないとか分からないという方が年々増えている。これは一体私にどのような問題点があるのかな、内容に問題点があるのかなということで、喚起するはずなんですけど実は喚起していなかったということがある。最後に時間になりましたので、今後の課題、興味を引き出すような内容と方法の改善、これは私の努力次第でできることなのかもしれませんが、それからもう1つは参加型授業を進めるために受講の学生数にある程度制限をしないと思うようにできないということがあります。それと参加型が可能になるところの施設、設備の選択とか設定とかが問題になってきます。それからもう1つ評価の仕方ですけども、参加型授業だから出席だけすればいいのかというところが評価に関わってきておまして、実際にこの授業を受講したきっかけというのはシラバスを見たからというのがありがたいことに多いんですけども、その次が単位が簡単に取れそうだからというのが結構多いんです。そうするとただで照れば単位がもらえるというのが先輩から引き継がれるとすればこれも問題になるのかなと思うのです。その辺で内容と方法、評価について大きな課題を残しているということです。時間オーバーしました。大変ありがとうございました。

ありがとうございました。ご討論をお願いします。どんなことでも結構ですが。

健康を論ずるにしても日常の食にまったく関心がなければ、いくら健康的な食べ方といっても、まず1つは自分自身の食生活を見直してみようというところが1つです。そこに地域社会論ですので、いわゆる地域の中でそういう食の地域的な特徴が出てくるのは一体どういう要因なのかということところです。

今日のテーマとはちょっと…。

地域社会論といって、別に地域社会論は地域社会論ですけど、そんなに厳格なものですかね。言葉にすると非常に厳格になりますけど。他にございますか。はい、どうぞ。

食事というものが非常にコミュニケーションにおいて大事だといわれておりますし、それからまた私共が普段考えていないようなことが食事の効果として、例えば日本の伝統的なお茶がいろんな日本の寿命に作用しているのではないかというようなことが言われてますし、そしてまた我々消化器をやっていると1番最終的に予防医学で問題になるのはやはり食生活ではないかという風にみんなが思ってますので、非常に僕は大事な授業で、先生の授業で6割の人がこの興味が増したというような結果が出てますけれども、例えばそれは非常に授業の効果があったという風に捉えていいのではないかな。僕はますます食生活というのは大事になると思いま

すので、非常に発展て言うんですかね、ますます大事になるのではないかとって拝聴いたしました。

工学資源学部の菊地です。ちょっと質問をさせていただきたいんですけど、授業の目標の中で、考える授業、参加型の授業というものを目標に挙げておりましたが、私もどうもそうしたいなと思いつながらなかなかできていないというのが現実なんですけど、実際一方的にお話される時間の割合が、そうじゃないアンケートを取られたりみんなで集団討論されている時間との割合って言いますか、それはどのくらいに毎回とっておられるのでしょうか。まあ、回によって違うと思うんですけど。それからですね、それが実現するためにはもうちょっと定員を少なくされたいというお話をされてましたけれども、実際はどのくらいだとそれが可能なのか実際の数のおおよそのところをもしお考えでしたらお聞かせいただければと思います。

配分ですけども、そのときの内容によりけりなんですけど、教室の中で検査をするときは、例えば前半は講義で、後半は検査をして書き込む、いわゆる記録するというのが大体半々位の構成、でほんとに検査だけの日も実はありまして、それは教室じゃなくて実験室などに移動して行きます。その場合ちょっとした説明があってほとんどいわゆる実験、評価に使うということになります。それで人数ですけども、もし実験室を使うとすれば理想は20人で、多くても30人が今の施設では限界かなと、でそこで実験室を移動させていわゆる教室を実験室として使うことが多くなってきたんですけども、それは実際あまりよいことでは、食べ物を教室で味わって評価するというのは実際あまり、そこでは実験したくないなというところが正直な気持ちです。今年の1期は約100人くらいになりましたので、その辺で受講数を制限して参加型の授業に持っていたほうがよいのか、あるいは興味をいやいやとられる方もあるかもしれませんが、そういう学生をどこで切っているのかというところが今悩んでいるところです。

落第点って、いわゆる参加型で、提出していただきますので、大体14回、15回の中で、例えば出席が半分以下、提出されていなかったらいわゆる成績は出さないという方向で、そういう学生は比較的少ないようですけども、ただ出てきて書いていくという学生さんが多いのかもしれない。そういう意味では。

学生さん、文句でもなんでもいいのでちょっと言ってください。

教育文化学部2年次の根本です。私は先ほど人数の問題があったんですけども、確かに発言しにくい理由の1つの中にあまりにも人数が多すぎて発言するのも気が引けるという気持ちがあると思います。でもこの資料の3番目のところに執行調査が入っていたり感応検査が入っていたりするんですけど、そういう風な場合は人数の多い授業のほうが他の人がどういう、同じ物を食べてもどういう風に考えるのかがばらつきが見られるので、そういう点では人数が多いのが面白かったと思いました。同じ物を食べても人数が少ないと同じ物を食べてもそんなにほかの人の考え方とかは気になんないと思うんですけど、そういう点では人数の多いのは、人数が多いのは、多くていいと思う点もありました。あと、地域と自分たち個人の中での食の問題についてが講義の内容だったんですけども、今家庭の中の食でよく小さい子供でも1人で食事をしているというのが最近問題になっています。そういう現代の問題になっていることについても討論みたいなのをやってみたいなと私は思いました。ただその地域ごとに何がおいし

と思うかという考えだけではなくて、家庭の中の食事の雰囲気ですぐは食欲がわくかというようにどうすれば健康においしく食べれるかというようなもっと身近な家庭の中についてというような範囲を狭くして討論みたいな話し合い見たいな形をとると、というのも私はやってみたいなと私は思ったんですけれども。

今のは殆ど結論に近かったですね。立派な発言で、そのまま先生と同じものだったですね。どうも有難うございました。そしたら、次、苗村先生、よろしくお願い致します。

授業の解説を今日ここでしてもあまり興味を持って頂けないのではないかと思います、ちょっと私が考えていることを話させて頂きます。重要なことはここに、パンフレットにして書いておきました。学生の印象・批判も、つい先日試験したときにですね、書いていただいたもの、そのままコピーして付けておきました。で、私の話の背景にありますのは、保健管理センターという、その、これあまり知られていませんが、結構大きな業界なんですよね。義務教育の半分以上が高等教育に進む時代で、いわゆる、大学局のなかの学生部関係のなかに、いわば含まれているわけですが、すべての大学に保健管理センターもしくは学生相談所というものがあまして、大学生が心身ともに健康で有意義な生活を送れることを支援するために、色々な事をしておるわけでございます。もうひとつ、私自身の精神科の背景というものがあまして、最近非常に問題になっております、精神的に高等教育に耐えられない学生の急増に対して、どういう風にするかという、まあ精神医学的であると共に保健管理センターの一つの大きな仕事というのが背景にあります。で、今日はそのことの一部を占めるその心身の健康問題を保健管理センターがどう扱ってきたかということなんですけども、教養部一般の問題として、教養教育の中でどんな問題を、我々から見るとどんな問題が上がってくるかという事で、ちょっとお話をさせていただきます。教養教育そのものはもう、私が大学に入った頃にはもう大きく議論されている問題でして、結局、その昔型の教養部はやめて、専門教育を縦割りにしていく形になってきたのは、皆さんご存知の通りなんですけども、また最近状況が変わってきてるんじゃないかという気は致します。それは、世の中が急変して高度技術社会になる中で、高校までで教えられる内容が非常にこう、不充分といいますかね、世の中で生きていくために必要なことが充分高校までに教えられない。例えば健康の問題、食の問題もそうでしょうし、環境の問題や、多分政治や行政や経済の問題まで最低必要な知識が、とても高校までじゃ教えられてないというんで、色々な意味でメディアについても健康についてもですね、リテラシーというようなことはメディアリテラシーとかいうような言葉が、これは欧米圏から入ってきてる用語でしょうが、教育の一つのキー単語になってくるみたいになっております。大学の概念そのものがもう変わって、義務教育の延長として子供を育てる力が必要だというふうに、少なくとも我々の保健管理センターの業界では十年あまり前から盛んに言って、国大教に提案をしたりですね、そういう活動を続けてきておまして、最近ようやく、広中委員会というものが出来まして、大学生活の学生生活の充実に関する諮問機関ですね、これが答申に出しまして、大分取り上げていただいて、ようやく日の目を見始めておる、というのが現状なんですけれども、もう少し子育てまでちゃんとやれないと、キャンパス自体がもたない、荒廃してしまうという基礎認識があるんですね。学問やるってのはそれはもちろんいいんですけども、そこまで子供達育てないじゃないかと、あるいは育てないとしても大学に出て来れない子供がどんどん大学に入ってきてると。どのくらいありますかといいますと、大体、非常に深刻な心の問題を抱えてる型が7%くらいおります。だから、一万人の大学では700人ですね、でそれはカウンセリングが

必要なんですね。数百人単位でサポートしないと大学生活を維持できない、これは頭がいいとか悪いとかじゃなくて、メンタルにそうなんですね。でもう少し色んな問題を抱えた人っていうのは十数パーセントに、合計としております。もちろん成熟してどんどん自分の専門を切り開いていける人もいるし、非常にこうワイドスペクトルで学生が入ってきてる。ますますそうなっています。それでも人集めが出来ない大学は潰れていく、今日もなんか週刊朝日に大きく書いてありましたけども、もう私学で補助金打ち切りになる大学が大分でてきたようですね。定員の半分に満たない大学が現に出てきております。もう30か50かなんだそうですけども、そういう時代で、我々はその地方の国立大学におるんですけども、例えばもう、大検経由の学生さんたちがどの学部にも…どの学部にもと言うと失言かもしれませんが、いくつかの学部に入ってきて、共通認識として大検経由の人達は何らかのカウンセリングが必要なんですね。一年生から四年生まで、こう昔ながらに言うと、随伴してサポートしてあげないと、キャンパスライフを全うできません。今は私のところでみてる人も二人いますが、まず喋れないんですね。そうすると誰が喋る練習をしてあげるのか、教育学部だったら教育学部の先生してくださいよと言ってもらっていただけないので、保健管理センターで人と人とで毎日向かい合って話す練習を一年半続けたんですね。しかしまだアルバイトももちろんできません。アルバイトもできません。一年半かけてアルバイトが3日できたくらいでしょうかね。もちろん授業にも出られないから単位も貰えない。しかし入学はちゃんとしてきてるんですね。そういう問題を一つの例として挙げますと、そういう人達から学問にももちろん向かう人、あるんですけども、大部分の人は実社会に出ていくわけですから、その社会に出て職業生活が維持できるような人間に育て上げなきゃいけない、そのために先生方が何してくれるんですかというのが、世の中の要請でしょ。しかしこれは、医学部はちと違うかもしれない。あるいは工学部はエンジニアを、今はとにかくITといっても人が足りないから。

それぞれの専門分野において全然状況が違うわけですね。で、教育学部は出ても職がないというので、保健管理センターで就職相談、進路相談に随分来ます。保健管理センターに来るんですよ。上手く対応してくれる人がいないから、昨日も一人来ましたね。ついでにボーイフレンドの就職相談までしていきます。そういうのが現状であるんですけども、まあ医学部にいる普通の先生方は全然ご存知ない。全然違う文化で、大学といっても全然自分だけの文化で暮らしておられる先生もまだたくさんおられると思うんですけど、まあ私どもから見ると、そういう色んな状況にそれなりに全て対応しなきゃいけない。まあもちろん、別にどの大学でもそうなんですけども、そういう中で、教養教育ってのはどういうふうにすべきかと考えますと、多分もう結論なんですけども、どうしても必要なこと、高校まで出て全然教えないけども、生きていくために必要なことをある程度強制力をもってつまり必須科目として、きちっと教えるというかなり強い姿勢は必要なんじゃないかと思うんですね。教養だから自由でいいんじゃないかと、いうのでは僕は甘いと思うんです。というのは、実社会と高校までの一般教育の間に大きなギャップがありすぎて、なんとか大学の4年間でそれを埋めないと、卒業はしてもうまく生きていけない、或いは職にもありつけない人もわんさか出てきているからですね。百万単位で、百万人単位で出てきております。そういうところで、専門は専門でももちろんビシビシおやりになると思うんですけども、教養科目を、強制しない教養…まあ言ってみればカルチャー・スクールです。そういうものとある程度これは必要だと、例えば今日の話題でありますその保健とか健康とかいう問題は、これは全ての国民にある程度のもので、基礎知識、保健とかね、福祉とか、まあそれ以外にももちろん経済とか行政機構も皆そうなんでしょうけども、今のかなり高度化した世の中で生きていくために、きちっと理解しておかなければならないこと、例

えば食事は美味しいか美味しくないかで決めたら駄目なんですね。そんなものは判りきってるんですが、甘いものと脂のものが美味しいのは決まってるんですね。そりゃそうなんです。だから犬だって猫だってみんなそうなんですね。それは遺伝子で決まっているわけですから、生物学的に決まっているものに弓引いたって勝てっこないわけで。だからそういう原則をきちっと教える方が大事なんです。色々そういうことがあると思うんですけども、そういう、例えば痴呆や成人病や、ガンとか、色んな国を破綻させてしまうような、世界全体がもう破綻してしまうような問題になってる環境問題もそうですね。いくらでもあるわけですから、そういうことに対する基礎知識と対策を、きちっと教えるという体制を大学がもたないで、どこが持つんですかと、いうことを僕は言いたいです。保健管理センターはまあ、その中のごく一部ですけどね、しかし、私のプリントの2ページ目見ていただいたら、その中でもかなり無理してですね、メンタルヘルスから成人病・感染症に至るまで、それから宗教問題に至るまで、入れておられます。16回普通あるんですけど、これ計算すると14回しかないんですね。まあそういう短い中で、できるだけコンパクトに他では教えられないことをですね、例えば性格と人生なんて一番深刻な問題ですね。自分の性格がなんで、他人とどんな関係を持ち得、或いはどんな関係で自分が沈没し、どうやれば上手く生きていけるのかなんて基礎知識、どこも教えないわけですね。そういうその、僕もやはり教えなきゃいけないだろうと。そういう風に考えまして、ごく簡単ではありますが、まあ保健管理センターはメンタル・フィジカル両面のシフトを敷いております。できるだけ現場の知識をわかりやすく持ちこむために、産婦人科の話、あるいは生命の誕生というの、やっぱり平野先生に来ていただいたりですね、怪我の問題は救急やっておられる遠藤先生に、毎年来ていただいておられます。そういうシフトで、できるだけ具体的な知識をお伝えして、ちゃんとした試験もやるんですが、最初、かなりいいスタートを切ったと思ってたんですけども、経過と状況ということに書いておられますけども、2、3年前に急になんか試験ができなくなってきました、医学部の学生なのに30点とか落第点を取る学生がでてきて、これはちょっとまた、対応を考えなきゃいけないと思ってレポートを、かなり一生懸命、宿題を出すようにしたんですね。そしたら何が起こったかというんですね、レポートを半学期に3つも出すような講義はもう受けないといって、皆がボイコットしたんです。これは私にとっても非常にショックでございまして、レポートは1つくらいだったら皆なんとか許容範囲なんだそうですけども、3つといいますと2ヶ月、一月半に大体5、6ページでいい、どっかの教科書の丸写しでもいいといっても、そういう慰めは効きませんで、一挙に受講者が数分の一に減りまして、私もそれでいたく反省致しまして、またそのレポートは半学期に一つと、しかもあまり勉強しないでも書けるレポートでもいいというくらいまで譲歩しまして、ようやく130人くらいまで回復したと。こういうの、先ほどの問題と関わるんですね。結局、どっかが厳しくすると、楽なところに急速に人口が大移動するんですね、こうシフトするんです。ただ教養部全体で考えとかなないと、結局一番取りやすいところで一番安易な道で全部揃ってしまうと。リービッツの最小律というやつですね。水が漏れるときは一番低いところから漏れていくという。ただそういうことを考えますと、やはり全体でもうちょっと教養教育のシステムを長いレンジで考え、組み直す必要があるんじゃないかと。したがって、ここに一つ、AとBという最後の提案書いてございまして、これはまあ当たり前のことなんですけども、もう一つはすぐできることとして、やはり教養、基礎の中でも大事なことは選んで、全学必須という部分を明確にし、だから3本立てですね、専門のための必須と、生活技術関連としての必須と、それから、いままでのもう少し自由に興味や趣味を選べる選択科目と、3つに分けることを僕は提案したいと思います。以上です。

ありがとうございました。とても示唆的なお話でした。質問ございますでしょうか。学生さんお願いします。

鉱山学部2年の小玉です。先生が今お話になったのは、授業の内容とはまた違う部分も多かったのですが、授業について意見を言わせてもらいますと、プリントにも生徒の意見がたくさん載っていて、だいたいこれに網羅されていると思うのですが、この講義は教養科目の中では受けた感じとして、教育学部と語学系の学部と医学部の生徒がたくさんいて3学部の生徒がいっせいに受ける講義としては珍しいと思うのですが、特に感じたのはやはり、他の講義と違ってその内容に工夫が見られる。どういう所かというと専門の先生方をたくさん呼んでその専門についてそれぞれの回で生徒に興味を持てるように話をされていたという所で、生徒としては興味を持って話を聞けたと思うんですよ。ただ、ちょっと医学部の生徒には良かったかもしれないんですが、教育や僕ら鉱学系の生徒にとってはちょっと専門的な内容で難しかったということも有ったのですが、それともうひとつ改善して欲しいのは内容が難しくて生徒間との意見の交換が無くて内容としては大学生、生徒自身の健康に関しての注意を喚起するような内容なのですけれども、これに対して生徒側の返答というか、「じゃあ、どうしたら良いのか」という部分での喚起について講義の中ででの対応にあたる部分が無かったというか、各自家に帰って考えなさいという感じで授業の中で、みんなこういう問題が有るけれどどうしたら良いんだという部分で生徒が意見を述べる場面が無かったという所で改善の必要があると感じましたが、全体としては他の教養科目と比べて非常に興味深い講義だったと思います。

そしたら、となりの君。質問等ないですか。

教育文化学部3年の熊谷といいます。保健管理センターのバイとの関係で先生の授業に関してもお手伝いをしているんですけども、学生の様子とか、だいたい同じような年代ですけども、様子を見ていたりするとやはり面白くなさそうに受けている人が絶対的に多いんですよね。まず、総じて一般教養科目は正直に言いますとどうでも良い科目で、ここにも書いてありますけれども本当に単位の穴埋めで取るような科目が何個かあるのは実際その通りなんで、その点に関してはやはり学生の受ける姿勢の方も問題があるのではないかと思います。ただ、そうやって受けていた人の中にも例えば自分で「おっ」と思うような授業科目があったりすると、いきなり起きて黙って授業聞いたりするんで、真剣に聞き出したりするんでその点に関しては授業の内容如何で学生さんの意識とか変わってくると思うので、それは授業の手伝いをしていて思ったことでした。あと、全体的にというか他の授業でもそうなんですけども出席だけとって帰る人がすごく多いんですよね。それ、なんとか出来ないのかなあ、というのは有るんですけども、なんか俺らちゃんと来て黙って受ける人が馬鹿みたいになってくるような人が何人もいるのがすごい俺は大嫌いなんですけども、出ないなら出ないでいいのに代返とか代筆で授業受けた振りしてるっていうのは嫌いなんです。そういうの何とかできないかなっていうこの場で言いたかったので、以上です。すいません、まとまりなくて。

はい、ありがとうございます。あの先生の方から何かいろいろ、あの先生の方ではなくてみんなの先生(笑)。これはやっぱりあれですか。主管必須があって良いわけですか。なんか僕

これ実はね、大学生と健康っていうのは僕は必須だと思ってたの。自分自身が錯覚してそう思ってたんですけど違ったんですね。

まああの教養基礎教育の方の理念はなるべく多くの科目を開講して学生の自主性に任せて自分にあったものを選ぼう、それを受講しようということが根底にあるわけなんですけど、けどもそういう良い意味の配慮をしているわけですが現実がそうではないということは私も十分承知しております。先ほど、出席のことを言いましたけれども、責任は学生の方にもあると思いますけども、出席をとる教官側にも問題があるとそのように思います。紙を配って名前を書く、そういう作業が出席をとるといことでは必ずしも無いわけではね、工夫して学生が最後まで授業を聞いているという環境を作ることがこれからの教官の役割ではないかなと思います。あと必修にするかどうかですね、これは各学部ごとの考えもあろうかと思えますけども、名村先生の理念から言いますと、こういうものが学生にとって必要であると大学側が判断するのであれば、やはり必須うということも念頭に置かざるを得なくなるだろうと思います。ただ、そうした場合に果たして、現在のスタッフで、十分な対応ができるのか、今度は授業の内容が変になってしまわないのかというような事が危惧されることがありますけども、必修ということは考えても良いかと思えます。

ありがとうございました。他に意見の有る方はございませんか。よろしいですか。そうしたら、このセッションはこのくらいで終わりにしまして、先生次よろしくお願ひします。

それでは三番目の話題提供に移りたいと思います。テーマは自然災害と防災ということで工学資源学部の松富先生お願ひします。

工学資源学部土木の松富でございます。土木といえば聞こえが良いんですがいわゆる「どかた」でございます。どかたといっても理由がございまして、先ほどの先生方と違ひまして私の用意してきたものは非常に雑ぱくでありまして本当に申し訳無いと思ってるわけでありまして、まあその点どかたということで許していただけたらな、というように思っているのですが、それで私この医学部は、これもどかたと関係するのですが、多分よっぱらって自分の意志なしで運ばれてくることくらいでそのくらいでしか来ないかなと思っていたんですが、来てしまいました。多分、私実際ふけているんですけどもここにいる先生方の中で一番若いということでここに立つことになったのではないかと思います。また、丁度講義を終えたところでした。丁度海外調査から帰ってきたところでした。断るわけにいかなかったもので、まあそういう事も含めて大雑把な話になるかと思ひます。お許し願ひたいと思ひます。OHP を使わせていただきます。

私案内がありまして自分の講義を説明しなさいということでしたので自分の講義を具体的に説明したいと思ひます。話は少し前後しますけど後でも話をしますがこの講義はオムニバス方式となっております。と言うことはいろいろな先生でやっておりますそうしますと話としてはこの講義の全体の構成の話をするというか構成というかどういふ方針で講義を行っているのかお話ししてかつ具体的には講義の内容ということで今度は私自身の講義の内容の構成の説明を行っていきたくと思ひます。それでOHPこの一枚でごまかせて頂きます。それで目標であります、一応自然災害の種類と発生メカニズム防災への対処方法などを理解してもらおうとシラバスには書いてあります。それでこれ基礎教育ですから今日くるとき調べてきたんですけども、

教養とはなんぞやと、そうしますと、知識を得て心を豊かにしそして立派な人間になると、そのようなものが教養らしいものの定義らしいのですが、そうしたときにはこういう言葉かなという風に思っておりますけども私自身としては教養基礎教育というのは啓蒙であると考えております。ですから別に大学1年、2年、3年生でなくてもいいのではないかという風に考えているわけでありまして。まあ、そういう気持ちで、これは私自身の考え方でありまして。

今日ここに立つにあたりまして他の先生方と話し合ったということとはございません。ですから、この2行目に関しましては私個人のものだと理解してください。それでなぜ私がそういう風に思い立ったかと申しますと、ありがたいことに海外を含めていろいろなところの被災現場を見させていただきました。それで日本とかいう所では私ほとんど被災が起こってその後、例えばここで対策を考え、そしてまあ色々な委員会とか出来ますけども、日本ではあまりそういう委員会に入ったこととはございません。しかし、外国にいった時にはですね、で最近の津波は後でも示しますけども後進国、言葉は悪いかもしれませんがそういうところが多いわけです。そうしますと被災のときに入りますがその準備として何かあるかといいますと、その国に、私の専門は津波なんで好けども津波対策なら津波対策に対して何かレコメンドをくれという要求がきます。そうした時に色々なことを考えます。例えば後進国のような所ですと、日本のように防災構造物、コンクリートで作るなんていうことは出来ません。そうしますと、正常といいますか、生業といいますか、それをも考慮して例えば、パパイヤの木を植えたりとか、バナナの木を植えたらどうかと、そのようなレコメンドをしてきます。それでそういう事をいろいろ言うんですが、最終的にはやはり防災教育になってしまうんですね。それで多分日本でもコンクリート構造物で防災構造物を作ったとしてもやはり防災教育ですよということになる、それをもう10回くらい経験してきております。ということで、私は大学生の講義かもしれませんがけども一般市民を対象にしたようなそういう気持ちでこの講義をやらせてもらっております。そしてまた、昔、戦前、戦中はこういうものがありまして、これも津波のお話なんですけども和歌山県の話で坂口ごりょうという方が自分の私財といいますか米を燃やして皆さんを引き寄せて海岸地帯に澄んでいるところの皆さんを坂口ごりょうという人は庄屋さんでしたんですけども、その家の稲村が焼けているということで皆さんが集まってくると、それでもって人が救われた、そういう例があったんですね。要は、昔は防災教育をちゃんとやっていたんですね、今はないわけです。としますとこの機会を得て私はそういう気持ちでやったらいいんじゃないかということで私個人の考えで、啓蒙ということを考えてやっております。

次に対象学生でございますが、全学部の1～3年生です。実質は鉱学資源学部の1年生です。それで今年度の前期の場合ですと教育学部が15人くらいですかね、で医学部が5人くらいあとは鉱学資源学部で一応最初の申し込みは百数十人くらいあったんじゃないでしょうか。で、私が講義して、その後にレポートをもらったときはどのくらいでしょうね、70から80人くらいまあ半分くらいに減ったかもしれません。そういう状況でございます。

それで今度は講義についてお話しますけども、この講義は各期後半1期、2期に分かれておりまして、各期後半で年2回やっております。それで先程申し上げましたけどもオムニバス方式でございます、テーマとしてはここに掲げております6個を取り上げております。で、この6個が自然災害ということにおいて適当かどうかということなんですけども、これも急遽、調べてきたんですが日本に日本自然災害学会というものがたかだか1,000人くらいしかいない学会があるんですが、そこで課題としてやっているものはこういうものであります。順番は先程お示しました6つの課題を順番に並べてみたつもりです。そうしますと、最初地盤災害というのがございますけどもこれはもうそのもので我々取り上げております。括弧書きしてありますがこ

の括弧書きは学会にはこういうテーマはございません。ですが、一応我々はこういう風に取り上げているということです。これは私の判断ですけどもここに入るかなどと思っております。で、その他異常気象、雪氷、強風という分野がございますが、それに関しましては、まあ気象災害ということで全部は網羅しておりませんが、一応そういう類のテーマは取り上げているかなと思っております。

次の震度、地震予告というのがございますが、それは地震災害ということで多分教育文化学部の野口先生あたりはこの辺りを交えてお話されているのではないかと思います。後は河川、沿岸海洋であります。それは津波災害ということで私が担当していますが、沿岸海洋にあたってしまいますけども取り上げているかなという風に思っております。そして火山はそのまま取り上げております。であと農林人文というのがございますけど、これに関してはこの講座では取り上げておりません。で私の個人的な話ですけども最近特に阪神大震災の後ですね。心のケアということでこの辺りが非常に取りざたされている所です。それから今の我々の講義で足りないのは人文社会かなという風に思っております。まあそれが足りないとしても7分の6ですから結構全てを網羅している講座になっているかなと思っております。

次にここで話のつながりを出来るだけ考慮という風に書いてありますけど、例えば地震災害が起こってほとんどの場合全部ではございませんが津波災害が起こるという風に考えられております。ですからこのようなことを考えてこの順番は考えております。ただし諸先生方は忙しくて来るときもあるというのが実際であります。次に講義の内容でございますがここに書いてありますように講義の内容の構成例ということでこれ私の講義の内容例でございます。それでどういう風にやっているかという、どこで、どうして、どのくらいの頻度で起こるかという話をします。私の場合は全てスライドです。すべてスライドでお話しております。具体的にはどういう風にやっているかと申しますと、これは人のデータとかどんな地図帳の裏にでも載っているようなものなんですけど、この辺りはもう人のふんどしで勝負するしかございません。このように地震の場合ですと起こる所は決まっています。例えば環太平洋が多いんですよ。それで日本は面積は全体の0.25%ですけども、地震によるエネルギーは10%も出てますよ。そのくらい多い所ですよ、とそういうお話ですね。で次にどうして起こるのかというのは私自身地震の専門家ではないので人のふんどしで相撲を取るような形ではございますが、こういう風にして地殻が動いているよとか、地殻が動いているのは本当かいなという、そうするとビギナーというのはこういう風に考えて本当らしいですよとかそういう尤もらしいことを話しております。そして例えばどのくらいの頻度で起こるのでしょうと、このデータは意外なんですけどマグニチュード8または、それよりも大きいのはだいたい年1回なんです。そのくらいのものをこのくらい地震が起こったからといって必ず津波が起こるとは限りません。が、まあこのくらいです。だいたいマグニチュード7.6くらいになると津波が起こりうるということです。ですから年間にこういう割合なのだと、この辺りのことを知ってもらうのも重要なことではないかと思っております。

次に現象の基本的な性質と分類要は津波というのはその言源をある程度理解しているかと思っております。発生する所ではたかだか数メートルなんです。水準は数千メートルです。そして、その広がり大きいものでは800キロあります。そういうところで1メートル、2メートルの津波が発生しても誰も気づきはしません。そして、人が住んでいる港にきてはじめて気が付くというそういう現象でしてそれで結局は沖では小さいんですが陸に近づくと大きくなるということなんです。で、それを説明するのはたった一つ概念なんです。それは水深によって波の伝播速度が違う、たったそれだけなんです。そうすると例えばこのあたりを学生はとてもよく

理解してくれるんですが、発生した波の前のほうと後ろのほうとでは前のほうが陸に近いですからどうしても水深は浅いです。一方、後ろの方は水深は深いです。ということは後ろの方が伝播が速いわけです。波が後ろから追いついてくるわけです。そうすると、短い所にどうしても盛り上がったものが入らないといけない。そういったことによって津波は大きくなる。そのあたりを漫画チックにしました。要は水深によって決まります。波が大きくなるか小さくなるかほとんど説明できます。もう一つの重要な現象としてですね、水深によって違うということで説明できるのは、皆さんが知っている言葉では屈折という現象ですね。先程前が遅くて後ろが速いというのは潜水変形という一つの変形なんです、屈折というのは皆さんご存知だろうと思います。これは横方向の波の伝播速度の差なんですね。ということは横方向の水深の差による波の変形が大きくなるという現象なんです。それも漫画チックに説明すると学生はよく理解してくれます。一応そういうことで例えば私の場合ですと現場の写真いっぱい持ってんで、それを使って説明します。例えば、分からない先生も居られるかもしれませんが日本海中部のことです、男鹿半島辺りの津波っていうのは、じわじわじわと上がったんですね。で、それに比べ能代とかその辺りは波が壊れてきたんです。波が壊れるというというのは波高がでかくなっているということなんです。ところが、男鹿半島辺りはじわじわと波がきたということは波高が大きくなってないということなんです。ということはどういう事かということあの辺りは岩礁地帯ですから急に深くなってますね。とすると波が大きくなる要因が他のところに比べて小さいということなんです。そういうものを先程の波の基本的性質と絡めますとそして先程の男鹿半島とか能代の写真を調べますと非常に理解してくれていると私は受け取っております。その次どういう話をしているかといいますと、最近の話題ということですね。調査してその写真を見てもらっても仕方ないということで、最近の話題を必ずすることにしてあります。最近日本のはちょっと古いんですが日本海中部を除いてこの程度起こっています。先進国は日本だけですけれども、一応このくらい起こっております。で、それぞれですね、話題が起こり問題が起こってきます。取り立たされる問題が色々あります。例えば、日本海中部の場合ですと波の分裂と言いまして、本来ならば、周期の長い津波が周期の短いものに分裂したと、初めて、写真でとられたような現象なんですね。そういうことが話題になりましたよと、そして、どの程度分かっていますよ、またこういう波がどういう悪さをしますよそういうお話をしてあります。で、もう一つのお話は何かと言うと、一番身近な例としましては北海道南西沖ですね。島周りの現象というのがございまして、要は奥尻島の西側で津波が起こったわけですけども、意外と、奥尻島の反対側ですね、ですから北海道の本島側のほうで大きな津波が記録されているんです。で島の背後が大きくなったんですね。それが非常に話題になりました。と言うことで、それがどうして起こったんでしょうとかですね、最前線のお話を学生に聞かせるようにしております。で、最近はまだ海底地滑りです。パプワにしてもそうですし、その他いろいろな所で、例えば北海道南西沖にしても、31メートル70くらい津波の高さが上がっていますけれども、それも、私個人の考えですけども海底地滑りではないかなと思っております。で、ただ単に調査結果だけをお話するのでは面白くないと言うので、最近の話題みたいなものを取り上げてお話をしてあります。で、今度具体的に実際の例ですね、それをお話するようにしております。スライドがいっぱいありまして、その年度年度で取り上げるものが違ってきます。が、必ず、含めるものとして人は被害です。人命の被害ですね。で、この時は明治三陸大津波と言いまして、2万2千人くらいの方が亡くなったときがあります。で今度は昭和三陸大津波というのがございまして、やはり3千人くらい亡くなられております。それで、その時の傾向が全く違うんですね。例えば明治の場合は流出家屋と人の死んでいる数がものすごく相関が高いんで

す、それっていうのは、津波の知識がほとんど無くてですね、みんな家族が家にいた、夜と言うこともあったんですけどもね、まあそういうことで亡くなっている。ところが、昭和の津波の方はまだ30数年しか経っておりませんで、当然そういう知識を持っておられる方がおられます。そうすると、人の対応がでんで違ってくるんです。過去の経験をしている人は地震を感じたら即逃げると、そういう対応を取られる方もおられるでしょう。が、初めての方もおられるでしょう、と言うことで人の対応でんで違うというあたりをここで示してあります。そうすると多分一番最初の啓蒙をしていることになるのではないかと考えております。で、もう一つはですね被災事例ばかりではなくていい事も見てやろう、そういう視点に立って講義を行っております。それが防災技術の到達度というやつです。たぶん皆さん方は1993年の奥尻沖の南のあたりで津波が大きく防波堤をオーバーして、多くの方が亡くなったと、なんで防波堤をもっと高くしなかったんだと言われるかも知れません。確かにもう今のやり方ですとあれ以上高くすることは出来なかったんですね、行政的には。ところが、別の見方をしますとですね、我々防災構造物を作るときはそれが壊れると思って作らないんです。ということは、それを超えると思っては作らないんですね。ところが超えてしまったんです。としたときに我々は何をしようかという、プラス思考になりまして、あの場合は防波堤のてんばから5メートルくらい水深があって悦流していったんです。抱けども我々の作ったものはそれに持ちこたえたんですよ。今までそれを超えるという発想は出てこなかったんですね。従ってどのくらい持ちこたえるかというのは分かってないんです。ところがそういうものでも持ちこたえた、そういうデータ、あるいはそういう見方をしよう。で、若い学生さん方にはそういう見方もして欲しいですよということを必ず言うようにしています。で、あとは対策方針ですけども、後の方とも関連するんですけども、ほとんどここまでいきません。1回の講義で90分ですか、そうしますと大抵この辺りで終わってしまうんですね。本当は何が言いたいのかという私の場合はここまでいかないで、ひょっとしたら、私は学生を連れてきていませんけども質問すること無いですねそれくらいにもやったように言いますけども、こういう風に日本の防災対策はどうなっているのかということで、防災施設と防災体制と防災地域計画でやりましょう、で津波の場合非常に面白いんですね。何が面白いかといいますと津波の場合は超えますよ、津波が来れば超える可能性がありますよ。例えば、二、三十年に一回は越えて下さいよそういう施設の作り方しかしていません今は。超えるのを前提にやってるんです。その分あと防災地域計画とかですねそういう風なものでやりましょうということですね。ですから非常にユニークな分野だといえるかと思えます。こういう日本の防災体制です、今ここでは簡単にしておりますけども具体的にどういうものを使ってやるのかとかですね、そういうお話をしようかと思っておりますが時間が足りないというのが実情でございます。あとは講義方法ですが、6人の先生方が居られまして、私はスライドオンリーです。で、他の先生方に聞きますとビデオを使ったりとかですね、例えば土に関することだと、やはりビデオでコンパクトに教育的にまとめられた物を使うのがやはり良いのかなとは思っておりますけども、とにかく諸先生方は視聴覚機器を使ってるという状況でございます。で、災害ですから皆さん現場のデータをお持ちです。実データを用いて皆さん講義を行ってます。で、あとはその他としまして反省といいますかそういうことですが、これは先程から出てますが人数が多くて知識の伝達のみになりがちだと。で、時間不足、これは私の講義の構成が悪いのかもしれませんが、それで、ひとつ申し訳ないなと思っているのは6人の先生方でお話しまして、先程の前の先生方のあれでも、いろいろな講義の先生がおられてその辺りの連携どうなのかなというのが疑問だったのですが我々の場合、ほとんど連絡を取り合っていないんですね。で、そういう意味で、一貫性が無いといいますかそれぞれのお話

でどう繋がりがああるんだろうとかですね、そのあたり、学生にとっては取り付く暇は無いのかなと反省点を持っております。それと次、意味深長な言葉ですが1度きり1回きりの講義ですね。そのあとレポートがきます。そうしますと我々一番最初講義をやるときに6人の先生方が集まって挨拶して自己紹介するんですね。それで覚えてくれているものだと思っているのです。シラバスもあります。ところがレポートを見てみるとどこにいるんですかとか、愛着が湧かないというニアンスのことを書いてあるものが多いんですね。それともう一つはレポートを書いていると本当はこういうことが言いたかったんだけど、違うように理解してレポートを書いているんですね。そうした時にどう訂正したらいいのかなと合う機会が無い、という状況です。この辺りは思いついた反省でございます。私の場合は実際行っている講義の内容をそのまま話させていただきました。以上でございます。

それでは私から。学生の構成が、工学資源学部がほとんどで、あその他の学部が若干名という話でしたが、工学資源学部の中でも学科の構成が、偏っていたりしているのでしょうか。

受講生が百数十名いて、私が受け取った出席とレポートは7,80名その位だって言いましたが、その前の時その後の時が果たしてその位の数になるかというのはちょっとチェックしていません。学生がある程度知ってしまして、全部出席しなくても単位が出ると思っていて、回を代えてある時は出てある時は出ないという風になっているのかもしれない。実際問題としてこの講義は工学資源の土木の先生方が6割、7割占めておりますので、土木の学生が聞いてくれてもいいのではないかなと思うのですが、今年の名簿を見ても非常に少なく一桁という状況でした。

他にはだいたい満遍なく各学科から来ているのでしょうか。

受講が目立ったのは、電気・電子が意外に多いのと情報と機械ですか。それは私の時だけかもしれませんけれども。

そうですか。先程の「生活に必要な」という事、「必須うんぬん」という話がありましたけれど、この講義もかなりそういう意味では一対一じゃないかなという気もするのですが。

どうなんでしょうか。ただ、できれば、私の場合ですとやっぱり2回くらい、講義をやりたいなと思っています。

他に何かご質問ありませんか。

防災の場合は、救急体制とか情報のシステムの事は入っているのでしょうか。

たぶん、人文・社会に入ると思います。阪神大震災以後、この分野が今非常に強められていると言われております。本学では今のところ取り入れることができないのかなと思っております。場合によっては、苗村先生に災害のケアということに入ってもらってもいいのではと思っております。

他にございませんでしょうか。どうぞ。

先程、やっぱりオムニバスの授業だと時間が不足気味になるというお話がありましたが、その話の続きはそれぞれの教官の先生方の専門の授業を受けないと聴けないのでしょうか。

そんなことはありません。私の場合は啓蒙ということを考えていますから、小学生でも理解できるようにしているつもりです。

そうですか。

先程言いましたことは防災体制ですから、例えば、どの様に日本、気象庁始めいろいろな省庁がどういう風にやっているか、どういう考え方でやっているかというお話をしようとしていますので、算数が出てくるということはありません。

オムニバスの授業は教育文化学部にもありますが、各先生方2時間位、2日間だけですので、本当に内容が浅すぎて結局その先生の専門の方の授業を聴かないと、いくら興味があっても詳しいことは分からない場合もあるし、それにその授業を受けたいと思っても時間割の関係、単位の関係、受講資格の関係で受講できないことがあります。だから、オムニバスの授業は意味があるのかなというのが前から私疑問だったのですが先生はどうお考えですか。

先程、基本的な性質っていうのがありましたが、私の学科ではアドロンを教えますので専門に進めばできるようになると思います。ご質問で、オムニバス方式が有効かどうかですが、啓蒙ということに重点をおくなら、非常に意義があると思っています。教官にとっても、説明の仕方が算数を使って説明するのではなく、短い時間でまとめるのは訓練になりますので、勉強になっていますので考え方次第だと思います。

ありがとうございました。

どうぞ。

オムニバスはいい部分もあると思いますが、現在本学で行っていることに関しては、決して誉められるものではない科目が半分以上あるのではないかと思います。私自身もオムニバスを一つ行っていますが、実際にコーディネーターとかオルガナイザーという人と相談して、この科目はこういう理念で、こういう所を学生達に分かってもらおうということで、個々の教官の役割は全然共通性が図られていないが実情で、担当する教官自身に任されている。他の教官は口をはさめないような事になってきますから、そこがオムニバスの大きな欠点だと思いますし、教官が毎回毎回入れ替わるという事で、つながりがないことも当然出てくると思います。これは急には直らないかもしれないが今先生のお話を伺って先生方は熱意のあると思うので、それをうまく連携させるのがこれからの課題だろうと思います。学生さんの意見はたいへん貴重な意見だと思います。

私どもの学科の話になりますが、オムニバスの授業がいくつかありますが、学生から見ると、

今のお話のように入れ替わり立ち代り入ってきて話の連携性がないようなことで、アンケートを取ると不評があります。苗村先生の「大学生と健康」のアンケートを見てみますと、いろいろな先生がいろいろな面白い話をしてくれて面白かったというような感想もあるので、いろいろな受け止め方があるような気がします。ただ科目による気はしますが、できれば一人の人で一貫して話せるものがあればその方が、例えば応用化学概論が私どもにあるのですが、それがもしかかなり年配の先生でかなり全般をご経験あるような方が通してやってくだされば、一番本当はいいと思いますが、違った意味でのデメリットもまたあるので、どっちがどっちとは言えない状況です。今のところ私どもの所では折衷案でやっている部分があります。他のご質問ありませんでしょうか。はい、どうぞ。

一般的な話になりますが、休講にはオムニバスの場合、順番がありますが、くるったりした時とか、前後にした時の休講は、先生どういう方法をとるのでしょうか。

これは一期の後半でだいたい7回から8回講義取れることになっております。一回目が顔合わせです。そして6回が実質の講義です。一回予備日をとっておきますので、どうしても都合がつかない場合は、その予備日を使うようにしております。順番がずれることは一応考慮してありますが多々あります。

他にございませんでしょうか。それではこのセッションを終わります。どうもありがとうございました。

オムニバスの極致お願いします。

医学部の産婦人科の田中でございますけれども、私は「女性の健康と社会」を講義していますが、最近、東北・北海道地区大学の一般教育研究会に参加させてもらいまして、どのようにして学生に興味を持たせて気をそらせないで授業を進行・展開するかということについての講演と討論があって、そこに自分の身をおいて肌で感じてきたことですが、面白い意見に「教師は桂文珍になる必要がある」があり、どういう事かと言いますと、今の学生は生まれてきた時からそばにテレビがある。講義をする時には明確にイントロダクション、それから泣き所、さわり所、言うなれば落とし所をまず明確にしなければ学生は講義についてこないと言っておりました。私は、それは大事なことだと思っています。今日私は、そういう勘所を持たないで漫然と講義をしていたわけですが、どのようにイントロ、泣き所、さわり所を進めていくかについて今実験的に講義をやってみたいとは思っております。しかし、時間もだいぶ経ち3時から5時ということですから、私に与えられた時間は今日増田先生にも確認したのですが15分から20分ということなので、途中で終わったらそこで終わりとしたと思っています。それからもう一つ、その教養のこの基礎教育ということで勉強させていただきましたが、教養の基礎教育の不要論というのがないわけでもないのですが、いろいろなその会に出てきて、学生の人間形成を目指して社会に対する目を養い、幅広い視野を得させるための基礎学問として意義付けられると、私は全くそのように思っています。学生として自分の健康を知ること、また女性の健康を男性が知るということは、全くその意義にかなうものだと思っています。私が今してる講義は、まさに幅広い視野を社会に対する目を養って幅広い視野を広げるという意味では、女性の健康を知るとはたいへん必要な講義ではないかと自負しております。

これはイントロです。今年は、長島ジャイアンツが優勝してたいへんおめでたい。これは男性社会なわけですが、私にはたいへん嬉しいし、学生の中にもこういう事にたいへん興味を持っている方がいらっしやると思いますので、このようなスライドを先に見せるのも有効かなと思っています。一方で、私は野球好きですので、このイチローの打撃フォームをもっと拡大しますと、イチローのどこが好きかと言うと、打撃フォームよりもこの目が好きなんです。その球を打つ瞬間の目、この新聞の記事は理想の打撃と書いてありますが、これを「かいげん」と読むか「かいがん」と読むかは取り方によって違うわけですが、イチローの場合は、開眼（かいがん）間近であろうと、こういうもので学生の心をキャッチすることが授業をする者として必要ではないかと私は思っています。

一方で、男性社会の野球、今回のオリンピック、ピントはずれの文章を今日書いて出したのですが、増田先生から「この講義をやりなさい」と言われ学生に講義するものと思ってきたのです。内容もそう書いていたので。男性の野球、今回のオリンピックでは非常に女性が活躍したが、女性がオリンピックで活躍したという事は、女性の健康の象徴であると思っているわけです。男性が活躍する以上に女性が活躍したという事に、われわれは喜びを感じるわけです。だから柔ちゃんが、柔道で優勝したというこの写真も非常に印象的ですが、これはそのために採ったのではなくてこの good loser ですね、負けた人の態度が非常に立派であることを示すためにこの写真を撮った。これもたいへんいいのですが、この方の、日本人でも今このような姿勢を取れる女性はいないんじゃないかということで撮っているんです。それからもう一つは、同じ日本人が200mの背泳か100mの背泳か忘れましたが、この人が3位になってその人が4位になったのですが、その4位になった女性が本来であればメダリストとして囑望され、みんなに期待されていたわけが、心から3位の女性を祝福しているのです。非常に、good loser っていう同じ種目で同じ日本人で競って、そしてメダルを取れる取れないという境目に立たされた女性がたいへん立派な態度をとっているということで、メンタルな面での健康な女性ということで、朝日新聞か読売新聞だったと思うのですが撮ったんですね。こういうようなイントロから、女性の健康を語る時に、女性の健康の中には7th age があるという事を学生にまず教えます。女性の健康を一番見えない所で支えているのは何かを、卵巣であることをまず教えています。なぜ卵巣が女性の健康を支えているかということ、この卵巣というのは、生命の源である卵子をそこに抱いているからであることは言うに及ばないわけですが、その卵子を取り巻いている周りのこの顆粒膜細胞が女性ホルモンをたくさん作って、その女性ホルモンが女性の健康を維持しているんだということをきちんと教えるということが大切ですし、また、女性の健康を語る時には学生にそのことを知ってもらうことが、一番大事なことだと思っているわけです。こういう小さな原始卵胞から排卵直前まで至るまでに、だいたい80日かかると言われています。片方の卵巣から交互に一つずつ出て行くという事も教えています。女性は、そういう原始卵胞から排卵して、そしてうまくここで性交渉・セックスをして妊娠を希望していれば、ここで妊娠が成立していくということになるわけです。意外と、女性も大学生になっても女性の自分の体、自分の見えない所でどういうことが起こっているかということを知りません。ですから、女性に教えることは当然のことではありますが、男性にもそのことを知ってもらうことも、女性の健康のためには大事なことと思っております。その講義の仕方ということですが、この「女性の健康と社会」については、学生同士が課題を探究し、問題意識を持って講義を進めていくことは無理なわけです。だからわれわれは2回の講義でできるだけ平易に、女性の健康、女性の見えない所で何が起こっているかという事を、我々は教えてあげる必要があるのではと思っています。これは女性の子宮ですね。子宮からぶら下がっている卵管、また子宮から

ぶら下がっている卵巣なわけです。排卵の直前の卵胞というのは3 cm位の径になり大きく腫れます。そして卵が飛び出します。飛び出したら瞬間にその飛び出した卵は、卵胞というのは、黄体というものになります。これが組織なわけですが、先程言いましたように、いい事に今先生方も今日参加されている方も女性の体については全く知らないから、どんなに眠い人でも聞いた事おそらくないでしょうから、一生懸命聞いてくれます。学生もちょうどお昼御飯終わって、おなかがいっぱいになって眠くなる頃なんですけど、寝る人はほとんどいません。それから聴講生を調べてみますと、医学部の学生はだいたい5, 6人しかいません。教育文化学部と工学資源学部の方のほうが多いというのはちょっと不思議に思っております。将来、医者になる人は、医者になった時点もしくは医学部に来た時でもまた聴けるのではないかという考えでもって、参加者が少ないのかと分析をしていますが、なぜか医学部の学生は少ない。これが卵子ですね。先程言いましたように卵子を取り巻いているこの顆粒膜細胞というのがたくさんの女性ホルモンを作って女性らしくし、そして健康を維持している。その女性ホルモンをたくさんここから出ているということ。これは平面的なんですけど、立体的にはこういう原始卵胞があって、今の前のスライドはこの平面の所を見ているわけなんですけど、立体的にはこうなっているわけです。ここに満々と水をたたえておきまして、そしてここが消化酵素によって切れて、そしてこれが対極から卵が飛び出すと同時に水も飛び出す。従いまして、排卵の直前、排卵のその時にはおなかに若干の水が出てきますから、腹膜刺激症状として少し痛みを感じますし、径3 cmの卵胞に腫れますから、少し卵が出る側のおなかで女性は痛くなるという事は当然。それから、「排卵のない出血はない」、「出血のない排卵はない」と言われていますが、必ず、月経と月経の間、特にきちんと28日、30日サイクルで来る月経を持っている女性は、排卵の時には肉眼的にもしくは顕微鏡的に必ず出血を伴うという事を学生にきちんと教えておきます。そうしないと、月経と月経の間に出血があるということで思い悩む女性、女子学生がいないわけでもないわけです。誰にも相談できなくて、非常に悩んでいる女性がいます。ですから、排卵というのがどういうことであるか、排卵期にはどういう現象が起こるかという事も、体の変化・仕組みを教えておきます。これが卵を出した後の、その顆粒膜細胞というのは即、直ちに黄体という組織に変化して、この黄体から多量の黄体ホルモン、これは女性ホルモンではないのですが、今度は黄体ホルモンを出して妊娠に備えるようになっていくメカニズムがあるという事を教えておきます。このように健康な女性は、毎月一回でもってサイクルが見えないおなかの中で行われている。特に卵巣、子宮、しかも下垂体、視床下部、そういう所で女性は毎月きちんと周期を保っているいろいろな事が起こっているという。しかし、だんだん年をとって来ますと、10歳の時でその卵子を抱えている卵胞数が40万位になっています。なんと驚くなかれ、胎生20週くらいの時、すなわち5, 6ヶ月の時に、これはお母さんのおなかにいる5, 6ヶ月の時に、卵胞の数、すなわち卵子の数というのは200万個位で、最も多いわけです。それが生まれ落ちる直前の時には700万個位になっているわけなんですけど、生まれ落ちる時には200万位に減って、その数が減って、そして初経を向かえる頃にはわずかその40万になって、そして、だんだん排卵とともにその数を減少させていって、40過ぎるとついに数万個になって突然数千個単位になって、50歳になって、閉経とともに卵巣の卵子はなくなっていく。すなわち女性としての輝きをだんだん、また新たな、これを我々は更年期とよんでいるのですが、女性が体にドラスティックなその変化を遂げて来るんだということを教えています。40過ぎるとそういう卵子の数が、卵胞の数が減少すると同時に女性は40歳過ぎると、その女性を美しく健康を保っていた女性ホルモンってというのが、ここで急激に減少してほとんどなくなります。この女性ホルモンがなくなることによって、いろいろ女性はいろいろな症状が出てくる、すなわち学生さんのちょうど

お母さんくらいの年齢の時に相当する所に、第2の女性としてのつらい時代を迎えるということをお母さんに教えます。従いまして、中学生・小学生の頃にはたいへん優しいお母さんだった女性が、ちょうど学生、大学に入る頃になりますとちょうど50歳になりますから、この位の時期になって、このように40を過ぎて女性ホルモンが急激に減少して参りますと、ちょうど更年期にさしかかった頃からのぼせとかこういう不安とかずっと起こって参ります。そういう時に、学生、女性でも女子学生でも男子学生でも、お母さんとの接し方、付き合い方というもののあるべき姿というのをここでは教えておきます。今までの女性は、お母さんは、女性ホルモンがこのくらい出ている時にはたいへん優しく美しいお母さんだったが、美しさは変わらないにしても多くの女性はある意味では致命的と思われるような症状までも起こってくるわけです。そういうことを学生のうちにきちんと教えておくというのは大事だと思っています。これが受精してから妊娠経過とともにお母さんのおなかの中で、母体の中でこのように赤ちゃんが成長しそして子宮が大きくなり、そして経管が。これ僕はやめなさいっていうサインです、これ以上やったらみっともないからやめなさいっていう私にとってのサインなんですのでやめますが、今度自然に赤ん坊のほうからサインが送られて、そして経管が改題して赤ん坊が生まれてくる、というのが健康な女性。先程の40歳、50歳過ぎていってその reproductive age から更年期を迎えるという、女性の一生ということについてよく教えるわけです。しかし、今の社会は、健康な女性は reproductive age で子どもを生んで、そして、その子育てが終わって更年期に入っていくって、平均寿命の83歳、4歳まで生きていくわけですが、最近の世の中、社会というのは少し仕組みが変わってきており、女性の未婚率が高くなっている、男性の未婚率もなくなっているわけです。昔秋田の女性は10年前は平均23で結婚しておりました。今は、だいたい26から27歳dするようになってきている。もっと驚く事に、女性も、男性の未婚率もだいたい30を過ぎてきてるんですね、40過ぎてても結婚したい男性けっこうおられます。そのような晩婚率、離婚率が高くなると同時に、子どもの数が少なくなっているのは皆さんご存知だと思います。この子どもの数が少なくなっていることがこの女性の健康と社会において、今後の日本の社会において、また現代社会においても、たいへんいろいろな問題を起しているということをきちっと学生に教えておく事が大事だと思っています。従いまして、将来望まれる結婚をして、望まれる妊娠、そして、望まれる子どもを産めるような健康な体を学生のうちに、もっとその前から準備しておくように、我々は講義を通じて啓蒙しておくことが非常に大切だと私は思っております。ちょうど私の持ち時間になりましたので、この辺で終わらせていただきます。

ありがとうございました。ご質問、コメントございますでしょうか。苗村先生、こういう授業も必須の授業に近いですね。

そうですね。これは先生、男の方はどのくらい聴いているんですか。

6 : 4か7 : 3位です。

けっこう多く来ていますね。

結構男性来ています。もう一方の平野先生が妊娠に関わる問題をきっと話していると。

医学部の先生方が担当している授業は、専門の方でもそうですがほとんどがオムニバスです。

知識の投売りと僕は言っているのですが、系統だったものがどこにあるのかっていうくらいたくさんいろいろな事があり、これはどうしようもないと私は感じているのですが、それに関して、なにか意見ございませんでしょうか。先生の場合はそんなにオムニバスでないですね、これは2つに分かれている位ですから。オムニバスってというのは、たくさん先生の先生がそれぞれ全体のまとまりの中でいろいろな事を講義されるって感じですが。

医学部でこのテキストでやっているのは5, 6人の先生方です。

そうですか。

そのうちの「女性の健康と社会」についてはAとBの2コマ。その2コマを一つずつ平野先生と私でしています。

薬剤の鈴木です。先生は講義を通じて、いろいろと学生さんに対して問題提起をしながら、講義を進めていらっしゃるの是非常に分かるのですが、学生さんの反響とか、あるいは学生さんに対してアンケート等で、一番最後の先生おっしゃった事等々いろいろな社会的問題、大きな社会的問題も含んでいると思いますが、こういうものに対して今の聴講している学生さんがどんな考えを持っているのか聞かれたことはございますでしょうか。

講義の最後には、アンケートは取っております。多くの場合、やはりたまにこのペケつける学生もいますが、おおむね二重丸ついているようです。

私、今お聞きしているのは、先生の講義に対する評価という問題ではなく、今社会的現象として子どもの出生率が低くなっていますが、あなた達はどう考えているんだとか、もうちょっと大きければ、社会的大きな問題になってくるんだが、あなたは子どもをどのくらい作りたいと思うかと、というような諸々の事についてです。

是非、そういう問いかけをしてみたいと思っています。しかし、先程工学部の先生もおっしゃってましたが、1回の90分授業なものですから、どう思っているかについて聞くというか、時間がないもので、何かの方法で秋田大学の学生が今の少子化特に秋田県がワーストであるという現状に鑑みて、どう考えているか、是非それは僕調べてみたいと思っています。そういう答えから、解決策を見いだしたいですね。

今のご質問に関係するかもしれないのですが、保健管理センターに相談に来たりしてそういう印象を私もだいぶ聞きます。ご推察のとおり、ここ数年で、家庭を持ちたくない、子どもを育てたくないという人が非常に増えました。私の所にいろいろな悩みをもって相談に来る人の8割、9割は結婚なんかとても考えられない、子どもなんて欲しくないと言います。そういう時代で、もう統計の通りです。非常に、特に保健管理センターで相談する人は、いろいろな問題を持っていますから、私の身近では普通になりました。だから産婦人科の先生方は講義を単に知識だけではなく、オムニバスであろうがなかろうがメッセージを持って熱っぽく講義されますので、非常に学生に訴えるものはあるのですが、それだけでなかなか社会情勢まで変わるというわけでもないんですね。非常に難しい深刻な問題で、大学もそういう問題に対して

知らん顔はもうできない時代になったのではないのでしょうか。

なぜ結婚したくないかは日本性教育協会か厚生省かで、アンケートをしたら、結婚したら自由にお金を使うことができなくなったのが理由の1番に挙がって来ています。これは30数パーセント。結婚したくないという理由に、お金が自由に使えない、自由な時間が持てなくなるといような事が理由として挙げられてるんです。ですから、若者に対して今の学生諸君に対してその家庭を持つ、将来家庭を持って将来次の世代を自分達が背負うんだという認識を、意識改革をしていただくような何らかの方策を考えていかなければならないなと私は思っております。一方では、逆に高学歴化、秋田県では女性にとっての就職環境が非常にいいみたいで働く場が結構あるわけです。アパレル産業とかですね。そういう所に一旦勤めますと、なかなか子どもをその妊娠して分娩して、2年、3年っていう期間を過ごしてしまうと今度職場に復帰できないという事もあり、結婚したくないという事も言っているみたいです。もちろん我々だけが頭の中で考えるのではなく、社会全体として、地域として考えていかなければこの問題というのは解決しないと思っております。

どうもありがとうございました。幾つか問題が出たと思いますが、絶対教えなくてはいけないものがあるぞという事が出たのでしょうか。

長時間ありがとうございました。お一人お一人の時間が少し短くて、まだディスカッションできる部分があったかと思う所もありますが、1回目にしては大変2人の司会の先生方のお陰で、うまくいったと思います。科目のタイトルもさる事ながら、それを担当する教官の質が非常に大事とことを、今日のワークショップで私個人的に感じましたが、いろいろな意味で改善されて新しいスタートを切ったと。学生と教官とが一緒になるような形で、いい教養基礎教育が展開できればと思っています。先生方の協力、学生の協力よろしくお願ひしたいと思います。11月に、今度は工学資源学部の主催でまたワークショップ、この類似のものがありますので、それにもぜひ参加していただきたいと思っています。以上で終わらせていただきたいと思っています。どうもありがとうございました。

